

# 蟹江義丸について

末 岡 宏

富山大学人文学部紀要第 70 号抜刷

2 0 1 9 年 2 月

## 蟹江義丸について

末 岡 宏

### はじめに

蟹江義丸（1872～1904）富山県出身の哲学者で文学博士、今から100年以上前に亡くなっている。早世したこともあり余り知られていないが、明治期の哲学創生期の学者というだけでも十分に研究する価値があるだろう。また蟹江義丸は富山高校の初代校長南日恒太郎の高等小学校時代からの親友でもあり、富山大学人文学部とも浅からぬ縁がある。筆者は縁あって蟹江義丸氏について研究する機会を得、その遺稿その他の調査をすることができた。これを機会に蟹江義丸という人物を紹介してみたい。

蟹江義丸全般については、工藤卓司氏の「蟹江義丸與《孔子研究》——日本明治中期的孔子研究（蟹江義丸と『孔子研究』－日本明治中期の孔子研究）」<sup>1)</sup>の労作がありそれに詳しいので参照されると幸いである。ただ、工藤氏の論文は中国語で書かれており、日本語版は存在しないようなので、本稿では筆者の調査<sup>2)</sup>と併せその概要を紹介することとする。

本稿では、まず蟹江義丸の生涯と著作について説明する。次に蟹江義丸について、代表作『孔

---

1) 工藤卓司「近一百年日本《論語》研究概況——1900-2010年之回顧與展望」科技部補助專題研究計畫成果報告期末報告 致理科技大學, 2017年1月

<http://chihleeir.lib.chihlee.edu.tw/bitstream/310993300Q/2361/2/%E5%B7%A5%E8%97%A4%E5%8D%93%E5%8F%B8-%E8%BF%91%E4%B8%80%E7%99%BE%E5%B9%B4%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%80%8A%E8%AB%96%E8%AA%9E%E3%80%8B%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%A6%82%E6%B3%81%E2%94%80%E2%94%801900-2010%E5%B9%B4%E4%B9%8B%E5%9B%9E%E9%A1%A7%E8%88%87%E5%B1%95%E6%9C%9B.pdf>

附録一「蟹江義丸與《孔子研究》——日本明治中期的孔子研究」同 pp.26-76

2) 蟹江義丸の生涯を知る主な資料は以下の通り

「蟹江義丸氏逝く」『圖書月報』第2巻第10号 1904年

南日恒太郎「故文学博士蟹江義丸君略伝」『孔子研究』1904年附

桑木厳翼「故文学博士蟹江義丸君小傳」『學士会月報』第198号, 1904年後桑木厳翼『時代と哲学』隆文館, 1904年11月所収 pp.404-8

桑木厳翼「蟹江博士を弔す」読売新聞 1904年6月24日 後掲『時代と哲学』所収

浅野成俊「蟹江義丸」『富山の民性』光奎社, 1926年7月, pp.121-122

「蟹江博士の遺稿保存託さる」『静脩』第1巻4号, 1965.3, p.7

また次の南日恒太郎の記録『南日恒太郎遺稿と追憶』にも、南日恒太郎との交際の思い出、蟹江の妻操の追憶等が載っており参考となる資料がある。田部隆次編『南日恒太郎遺稿と追憶』, 田部隆次, 1934年7月

子研究』に焦点を当てその国内外の影響を中心に考察する。最後に京都大学附属図書館所蔵の蟹江義丸氏遺稿について報告する。

## 1. 蟹江義丸の生涯

蟹江義丸については南日恒太郎「故文學博士蟹江義丸君略傳」<sup>3)</sup>及び桑木巖翼「故文學博士蟹江義丸君小傳」<sup>4)</sup>の二篇の親友による伝記があるので、主にこれに基づいて蟹江義丸の生涯を追う。二つの伝記以外の蟹江義丸の生涯を知る資料については、随時触れていく。蟹江義丸の生涯でその学術生活は重要であるので、まずその年の出来事を記し、その後でその年の著作を記すこととする。

明治5年3月に富山市鹿島町生れた<sup>5)</sup>。父は曦(あきら)長子で一人息子であった。祖父は基徳。蟹江家はもと加藤清正の配下であったが、加藤家改易に伴い浪人となったところ、前田家に召し抱えられた家で、家老の家柄であった。祖父基徳(1829-1886)は大愚哉と号し、戊辰戦争で藩を指導し明治2年に藩の執政ついで大参事に任じられた人物である。義丸は祖父基徳に愛され、学を授かったようで、蟹江義丸の漢学の知識は祖父から教えられたものが多く、後の『孔子研究』の基礎となったものだと考えられる<sup>6)</sup>。

明治15(1882)年富山市啓迪高等小学校に入学、後の親友南日恒太郎と知り合っている。田部隆次(南日恒太郎の弟)の回想によれば、小学校時代からよく南日家に遊びに行っていたようである<sup>7)</sup>。

明治18(1885)年9月富山県尋常中学校(第2期生)に進学。後の親友岩間鐵朗(南弘)と知り合っている。南弘と南日恒太郎は中学校の校長を替えて欲しいとの建白書を提出したが、

---

3) 南日恒太郎「故文學博士蟹江義丸君略傳」『孔子研究』(金港堂, 1904年)巻頭に所収

4) 桑木巖翼「故文學博士蟹江義丸君小傳」『學士会月報』第198号(1904年)のち桑木巖翼『時代と哲学』(隆文館, 1904年)に再録

5) 加藤直久の回想によれば、幼児は城下町で過ごし、後鹿島町に引っ越したようである。(「故蟹江義丸博士三十年追憶会に於ける追懐談」(以下「追懐談」と省略)『丁酉倫理會倫理講演集』第371輯, 昭和8年9月, 「補足」pp.95-96)

蟹江家の遺構は2013-2014年ユウタウン総曲輪再開発に伴う調査で発掘されている。

「富山城下町遺跡・蟹江家」([www.pcpulab.mydns.jp/main/kanieke.htm](http://www.pcpulab.mydns.jp/main/kanieke.htm))「一番町地区の発掘(2013年度調査)」([www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/toyamajyo/jyokamati/hakkutu/5-1.htm](http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/toyamajyo/jyokamati/hakkutu/5-1.htm)) 蟹江義丸が生まれたのは発掘された富山城下町遺跡・蟹江家と思われる。

6) 蟹江義丸は漢学の素養が十分であったようである。京都大学附属図書館所蔵の「蟹江義丸氏遺稿」に唯一の蔵書として伊藤仁斎の『語孟字義』がある。筆写されたもので跋に「右者伊藤仁斎先生之著作也愚雖不学 有所見 親友ヨリ借置今寫上者也 于日之嘉永元(1848)年冬三 蟹江克己 謹書」とあるから、おそらく祖父蟹江監物基徳大愚哉(1829-1886)かその父、蟹江基承の書写したものであろう。これを見ても漢学の素養の一端がしれよう。後述「蟹江義丸氏遺稿(二)」2-1。

7) 前掲『南日恒太郎遺稿と追憶』「小伝」, p.73

蟹江義丸は同調しなかった。しかし南、南日、蟹江の三人は中学校を去ることになる。

明治19(1886)年に祖父基徳が死去している。

明治23(1890)年、金沢第四高等中学校の予科1年に入学し、前年に転学した親友の南弘は同級生となったが、一緒に受験しようとした南日恒太郎は眼病を発症したため受験できず、別の道を歩むこととなる。

明治24(1891)年東京の第一高等中学校本科に入学(転学)した。第一高等学校で桑木厳翼と同窓となる。桑木厳翼の家も加賀藩士だが東京に自宅があり、東京で初めて一緒になった<sup>8)</sup>。

明治26(1893)年文科大学国史科に入学する。しかし、考えることがあり、国史科を辞めて哲学科に転ずることとした。その理由は桑木厳翼によれば、もともと国史学を希望していたが、哲学や倫理学に興味を持ち、どちらにするか迷っていた。結局、元々の志望である国史に進み哲学の講義を聴いたところ、どうしても哲学をやりたくなり、一年間休学して専門を変えることとしたということである。桑木によれば第一学期の初めに専門を変える決断をしたので、その後の一年間を無駄にしないため、ドイツ語を勉強したということである。確かに大学入学後、ケーベルの授業を特別に聴きに行った等ドイツ語が達者であったとの回想がある。国史科を志望した理由、哲学科に転じた事情は、桑木厳翼の回想録に詳しい。なお大学時代は寄宿舍隣の本郷の潜龍館に下宿していた。

翌明治27(1894)年哲学科に入学した。在学中の明治29(1896)年に父曦が死亡し、蟹江義丸が蟹江家を支えなければならなくなる。蟹江義丸には男の兄弟はおらず、妹が3人いたので大変であったようである。その上に更なる不幸が蟹江義丸を襲う。卒業を目前にした明治30(1897)年6月13日吐血し、卒業試験を終えることができなかった<sup>9)</sup>。しかし同年7月には最優等(首席)の成績で卒業した。

明治28(1895)年の著作

1. 「上代儒教の根本的思想の變遷」, 『哲學雜誌』, 第10巻第105-6号, 明治28(1895)年,

明治30(1897)年、卒業後静養を兼ねて京都の真宗大学(現大谷大学)で哲学を教授することとなった<sup>10)</sup>。

---

8) 当時予科と本科を別の高等学校に行くのは珍しかった。

9) 当時東京大学は卒業論文の制度がなく、各教官が試験をして全員合格であれば卒業となった。従って卒業証書も卒業試験をした教師が全員署名する形式であった。卒業論文の制度ができるのは明治37(1904)年からである。(『東京支那學報』第3号「座談會 漢學會の回顧」pp.152-3)

10) 塚原政次の回顧によれば、大谷大学の前身(真宗大学)から、哲学科出身の文学士が欲しいとの依頼があり、塚原は大学院進学で行けなかったため、蟹江が行くことになった。「追懷談」p.89

明治30（1897）年の著作

2. 「墨子の学術」, 『無盡燈』, 第2巻第8～11号, 明治30（1897）年
3. 「カリエールが美學の立脚地」, 『帝國文學』1月号, 明治30（1897）年,
4. 「荀子ノ學ヲ論ズ」, 『太陽』, 第3号第8～第10号, 明治30（1897）年,
5. 「韓圖道德純粹理學梗概」『哲學雜誌』第12巻 1897年（工藤未見）

明治31（1898）年病が癒えたということで、東京大学文科大学大学院に進学した。同時に高等専門學校（早稻田大学）、淨土宗高等学院（芝中学校）等で哲学を教授した。大学院では井上哲次郎の元で学び、専門はカント以降のドイツ哲学と東洋思想である。同年富山市千石町の山崎操と結婚した。

明治31（1898）年の著作

6. 「韓圖の哲學」『哲學雜誌』第13巻第137-140号, 明治31（1898）年
7. 「韓圖の美學」, 『帝國文學』, 第4巻7月～9月号, 明治31（1898）年
8. 「シルレルが美學上の見解」, 『帝國文學』, 11月～12月号, 明治31（1898）年

明治32（1899）年9月高等師範學校講師の職に就き、翌明治33（1900）年高等師範學校教授（倫理学担当）となる。哲学・倫理学・東洋倫理学史・孔子の研究の授業を担当する。また臨時教員検定委員となり各地方の講習を担当した。

明治34（1901）年、井上哲次郎と共著で代表作『日本倫理彙編』を著す。明治36（1903）年にわたって全10巻を刊行。徳川時代諸儒36人の遺書を集め、学派別にまとめたもの。井上哲次郎との共著となっているが、井上哲次郎はその構想や分類を示しただけで、実際の作業はほとんど蟹江義丸が行ったようである<sup>11)</sup>。この作業が後の『孔子研究』に結実する。

明治34（1901）年の著作

- (4) 『ヴェント氏倫理學』, 育成會, 明治34（1901）年 倫理学書解説分冊第12
- (5) 『日本倫理彙編』 井上哲次郎と共編, 育成會, 明治34（1901）-36（1903）年<sup>12)</sup>
- (6) 『倫理學書解説』上, 下, 育成會, 明治34（1901）年
20. 「人生の危機」, 『丁酉倫理會講演集』, 第7輯, 明治34（1901）年6月
21. 「曾子の學に就きて」, 『哲學雜誌』, 第16巻第177号, 明治34（1901）年

---

11) 前掲「追懷談」p.331

12) 『日本倫理彙編』『卷一 陽明学派の部 上』（1901年）『卷二 陽明学派の部 中』（1901年）『卷三 陽明学派の部 下』（1901年）『卷四 古学派の部 上』（1902年）『卷五 古学派の部 中』（1902年）『卷六 古学派の部 下』（1902年）『卷七 朱子学派の部 上』（1902年）『卷八 朱子学派の部 下』（1902年）『卷九 折衷学派の部』（1903年）『卷十 独立学派の部』（1903年）

22. 「禮法に就きて」, 『倫理界』, 第2号, 明治34 (1901) 年

23. 「曾子の學につきて」 『哲学雑誌』 第16巻177号 明治34 (1901) 年

後「曾子の學説」と改題して『倫理叢話』(瀬木博尚1903) pp.12-27に所収

大学院時代の研究の成果として, 明治36 (1903) 年7月に「孔子研究」にて文学博士を授けられる。秋に綱川梁川を訪問して見舞っている<sup>13)</sup>。

明治36 (1903) 年12月結核が悪化し, 職を辞し沼津にて静養することとなった。居所は静岡県沼津出口町和田氏隠居所となっている。南日恒太郎・桑木巖翼をはじめ数名の友人が見舞いに訪れた。南日恒太郎は毎日東京の新聞を蟹江の元に送ったそうである<sup>14)</sup>。

明治37 (1904) 年6月19日死去享年32歳。六月二十一日沼津永明寺にて葬儀を営む。参列者は数十名で, 郷里・職場から遠かったため少数であった。桑木巖翼によると戒名は自ら「講学院中道挫折居士」と付けたが, それはあまりだということで友人たちが「講学院勤勇不退居士」と改めたということである<sup>15)</sup>。蟹江義丸の無念が伝わるであろう。

遺族は, 母, 妹3人, 夫人, 三人の女子であった。蟹江義丸の死後一家の生計が操夫人の肩にかかることとなる。そこで南日・桑木らが発起人となり, 遺児のための教育資金を募集したほか, 南日恒太郎は桑木と協力して, 操夫人を創立されたばかりの津田梅子の女子英語塾(現津田塾女子大学)に特別入学の便宜をはかり保証人となった他, 在学中の生活の手段も世話をしたようである。操夫人は, 卒業後, 女子英語塾に勤務し, 活躍した<sup>16)</sup>。

子は女子3人。うち上の二人は夭逝し, 三女秀子のみが成人した<sup>17)</sup>。

昭和8 (1933) 年6月19日「故蟹江義丸博士三十年追憶會」が開かれた。蟹江家が中心となって行ったものだったようである。『丁酉倫理會講演集』昭和8年9月号に掲載された。主催は蟹江操夫人と桑木巖翼, 本来なら主催者になったはずの南日恒太郎は昭和3年に亡くなったため弟の田部隆次が出席している。追憶会の出席者は次の通り

井上哲次郎(主賓, 恩師), 南弘(中学), 桑木巖翼(一高), 姉崎正治(寄宿舎時代), 吉田賢龍(寄宿舎・哲學), 田部隆次(南日との小学・中学時代), 塚原政次(真宗大学への就職), 中島徳藏(孔子研究の批評), 深作安文(書簡・俳句), 金成龜次郎(倫理彙編の校正), 乗杉

---

13) 綱川梁川「蟹江義丸君を悼む」(『梁川文集』日高有倫堂, 1905年7月), p.927-8

14) 前掲『南日恒太郎遺稿と追憶』「追憶」蟹江操 pp.144-146

15) 桑木巖翼「蟹江君を憶ふ」, 『丁酉倫理會倫理講演集』第33輯, 1905年6月, 後桑木巖翼『性格と哲学』所収「故蟹江君を憶ふ」と改題1906年, p509

16) 前掲『南日恒太郎遺稿と追憶』「追憶」蟹江操

17) 亡くなった時操夫人は24歳。義丸の遺児信子, 正子, 秀子の三女のうち上二人は夭逝したが, 三女秀子は成年し乗杉研寿と結婚, この時には二子をもうけていた。ちなみに, 蟹江義丸氏遺稿を京都大学に寄贈したのは, この娘さんのようである。

研壽（三女の夫）。その他に出席はしなかったが加藤直久が追憶会の記録の「補記」として蟹江家の歴史を書いている。

## 2. 『孔子研究』をめぐって

蟹江義丸の著作は、工藤卓司氏によれば、西洋哲学と（西洋）倫理学、東洋哲学と（東洋）倫理学、同時代の哲学と倫理学の大きく三つに分けられる<sup>18)</sup>。著作目録を見てもそれは明らかである。本稿では筆者の専門外である西洋哲学・同時代の哲学についての評価は工藤卓司氏をはじめとする専門家に任せて、東洋哲学の著作を検討することにした。東洋哲学における蟹江義丸の主要な業績は『日本倫理彙編』10巻と『孔子研究』である。前述したように『日本倫理彙編』は江戸時代の儒者36人の著作を集めた資料集的な性格を持ったもので、資料的価値は高いものだが、内容を哲学・思想の観点から考察するのは難しい。そこで本稿は、『孔子研究』に焦点をあてて論じることにする。『孔子研究』は明治37（1904）年蟹江義丸が著した著作である。蟹江義丸はこの前年孔子の研究で博士号を取得していた。蟹江義丸の序に「本書は予が大学院に在りて研究せし結果なり。」というように、大学院時代の研究成果である。蟹江義丸は前年の明治36（1903）年博士の学位を授けられているから実質的な博士論文ということができよう。その後、明治37年に脱稿し、出版されたのは死去の翌月同年7月であった。

冒頭に蟹江義丸の肖像、次に南日恒太郎の「故文學博士蟹江義丸君略傳」が付されており、次に井上哲次郎「孔子研究序」が続き、末尾の桑木巖翼の「『孔子研究』の後に書す」も含めて、蟹江義丸死去後に書かれていることから<sup>19)</sup>、蟹江義丸の遺著ということで補ったものと考えられるであろう。また蟹江義丸の体調がすぐれなかったこともあり、校正は田中好賢、吉野平蔵が担当している。それ以外の部分、つまり『孔子研究』本来の部分の構成は別表の通りである。大きく分けると「第一篇 孔子之事蹟」で孔子について各種の資料を総合して記して、「第二篇 孔子之學説」で孔子の思想（哲学）を西洋哲学の概念も使いながら分析するというものである。

### 『孔子研究』の構成

孔子研究序 井上哲次郎 明治37年7月9日

序 蟹江義丸 明治37年1月29日

---

18) 前掲工藤「蟹江義丸與《孔子研究》——日本明治中期的孔子研究」p.31

19) 南日恒太郎「故文學博士蟹江義丸君略傳」明治37年6月30日

井上哲次郎「孔子研究序」明治37年7月9日

桑木巖翼の「『孔子研究』の後に書す」明治37年6月30日



第一篇 孔子之事蹟

第一章 孔子の祖先

第二章 孔子の生誕及び幼時

第三章 孔子の青年時代

第四章 孔子周に遊ぶ

第五章 孔子齊に往く

第六章 孔子魯に用ひらる

第七章 孔子衛に在り

第八章 孔子天下を周遊す

第九章 孔子衛より魯に還る

第十章 孔子時世を慨歎す

第十一章 孔子と隱者

第十二章 孔子の晩年（其一）魯の國老

第十三章 孔子の晩年（其二）述刪

第十四章 孔子の終焉

第十五章 孔子の性格（其一）衣食住

第十六章 孔子の性格（其二）舉動

第十七章 孔子の性格（其三）知的生活

第十八章 孔子の性格（其四）情的生活

第十九章 孔子の性格（其五）意的生活

第二十章 孔子の性格（其六）圓滿と脱俗

第二篇 孔子之學說

第一章 孔子の學說の淵源

第二章 孔子の根本思想（其一）道

第三章 孔子の根本思想（其二）一貫の道

第四章 孔子の根本思想（其三）中庸

第五章 孔子の根本思想（其四）禮

第六章 孔子の根本思想（其五）仁

第七章 孔子の倫理說（其一）義務論

第八章 孔子の倫理說（其二）孝悌論

第九章 孔子の倫理說（其三）君子論

第十章 孔子の政治論（其一）徳治論

第十一章 孔子の政治論（其二）禮樂論



第十二章 孔子政治論（其三）仁政論

第十三章 孔子教育説

第十四章 孔子人性論

第十五章 孔子晩年の思想

第十六章 繫辭伝に見はれたる孔子の世界観

附録の一 論語の解題

附録の二 孔子関係書類

『孔子研究』の後に書す 桑木厳翼

この『孔子研究』について『東京大学百年史』は「蟹江義丸の『孔子研究』は経学から独立した斬新な中国古典研究の代表とされた。これらの刺激が漢学科に与えた影響は大きく<sup>20)</sup>」と当時としては斬新なものであったと評価している。また井上哲次郎の回顧によれば、『孔子研究』は孔子の事を述べる際には必ず触れられるほど評価されたという<sup>21)</sup>。しかし、桑木厳翼「『孔子研究』の後に書す」に「孔子は尊奉すべし、研究すべからず、」という批判があったことがわかる。その代表は当時の中国哲学の主任であった星野恒のようであるが、このような批判は、従来の漢学の護教的立場からの批判と言えるであろう<sup>22)</sup>。このような、孔子は研究するべきものではないという立場からすれば、孔子の事蹟と思想を分析した『孔子研究』は「斬新」であったのである<sup>23)</sup>。

さて、その後の研究者の『孔子研究』の評価を見てみると、『孔子研究』について、貝塚茂樹が高く評価している<sup>24)</sup>。貝塚茂樹は『孔子』巻末の「参考文献」で「蟹江博士の『孔子研究』

---

20) 東京大学百年史編集委員会 編『東京大学百年史』東京大学、1986年 部局史・文学部 p.510 ただし『東京大学百年史』のもととなる東京大学五十年史は中国哲学の服部宇之吉が主筆であって、そのため蟹江義丸に好意的な可能性がある。

21) 前掲「追懐談」p.68

22) 桑木厳翼「『孔子研究』の後に書す」前掲「漢学会の回顧」p.172 宇野哲人・佐久節の発言。ところで、星野恒は、もと重野安繹・久米邦武とともに資料編纂所の教授であって、考証史学を講じて人文科学の分野で真っ先に近代化をはかった一人である。その星野が『孔子研究』を護教的立場から批判したのは皮肉なことである。「考証史学」については関幸彦『「国史」の誕生 ミカドの国の歴史学』（新人物往来社 1994年後 2014年講談社文庫）に詳しい。

23) ただし、蟹江が『日本倫理彙編』を井上哲次郎とともに編纂していること、高等師範の教官であったこと、再版に際しては高等師範の岡田正之・諸橋轍次が校正していることを考えると、井上哲次郎・服部宇之吉らによってなされた儒教を道徳倫理教育と結びつける気風の中で評価され部分もあったのではあるまいか。

24) 貝塚茂樹『孔子』岩波新書、1951年、p.205、後『貝塚茂樹著作集』、第9巻（岩波書店、1976年）、pp.5-144。

は明治時代において、従来の和漢の研究を集大成した名著であった。その学術的価値は、今でも決して落ちない<sup>25)</sup>」と紹介している。貝塚茂樹は『孔子研究』を「和漢の研究を集大成」つまり中国歴代の注釈つまり古注から清代考証学だけでなく、伊藤仁斎・安井息軒ら日本の儒学まで広く資料を用いた点を評価しているのである。しかし、貝塚茂樹はその考察については「学会の進歩から取り残された」「最近の研究が抜けている」と余り積極的に評価はしていない点は忘れてはならない<sup>26)</sup>。これは、所謂京都支那学の伝統を引く貝塚茂樹にしてみれば、その考証の広範さを評価したのであり、井上哲次郎的な西洋哲学の概念を用いた分析には重きをおいていないからだと考えられる。

次に『孔子研究』を評価しているのが山下龍二氏の「明治の孔子論」<sup>27)</sup>である。山下龍二は、明治の孔子の再評価は、ダーウィンの進化論の影響を受けルナンの『イエス伝』をはじめとするイエスを人間として見る影響を受け、孔子も一人の人間として画こうとすることにあるとする。そして山下龍二は、『孔子研究』がイエスの伝記の影響を受けている点をまず評価している。確かに、『孔子研究』は孔子を一人の人間として画こうとしており、ルナンらイエスを人間として扱えと共通する、そしてこの点は井上哲次郎の影響があることは前稿で指摘した<sup>28)</sup>。

次に山下龍二は、「(2) 資料」で「この書の付録には、『論語』の解題・考証、孔子に関する古書資料、中国・日本の注釈や評論を網羅的に記しており、以後の孔子研究の指標となっている。」と貝塚茂樹と同じく、その資料としての高い価値を主張している。「(3) 政治・倫理」で「孔子の所謂途とは倫理政治の原理Ethiko=politisches Prinzipと謂ふべきものなり。」(二五二頁)というのは、後の孔子論の定型となった。」と、蟹江義丸の分析が後に引き継がれていくことを示す。孔子の学説を中国・日本の従来の研究の成果を広く集めて事実を明らかにしてから、西洋哲学の概念を用いて分析した成果も、「後の孔子論の定型となった」のである。このように山下龍二によれば、資料としての重要性、西洋哲学の概念を用いた分析ともに、優れたもの

25) 前掲『孔子』p206-208「蟹江義丸博士の『孔子研究』の第一篇「孔子の事蹟」には、崔述はいうに及ばず、和漢の学者のこの種の研究をよくとり入れているから、これについて見られたい。」

26) 「蟹江博士の著述は力作ではあるが、なにぶん四十余年前の出版であるから、その後における学会の進歩から取り残された遺憾がある。」「その学術的な価値は、今でも決して落ちない。しかし前にいったように最近の研究が抜けているのと、漢文をそのまま引用し、その表現が古風であるため、現代の読者には読みづらい欠点をもっている。」貝塚茂樹『孔子』, pp.206-208 (『貝塚茂樹著作集』第9巻, pp.138-139)

27) 『新しい漢文教育』第19号、全国漢文教育学会1994年、pp.12-22

28) 拙稿「梁啓超と日本の中国哲学研究」狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』, みすず書房, 1999年11月所収 pp.182-183, 井上哲次郎はその『井上哲次郎自伝』で、自著『釈迦牟尼伝』はルナンのイエス伝を意識していることを述べる。この見解が『孔子研究』の孔子の人間化となったものだと考えられる。

だったことがわかる<sup>29)</sup>。

さて、『孔子研究』が刊行された直後、『孔子研究』の評論が2種出ている。その第一は中島徳蔵「『孔子研究』を評す」である<sup>30)</sup>。これは中島徳蔵が「私は丁酉會で蟹江君の書かれたものを批評など致しまして、苛酷だと云ふやうな叱言を受けましたが、全く其通りで、心にもなくくだらぬ批評をして今恐縮に思つて居る譯であります<sup>31)</sup>。」と言っているものの、その批評は「第一章 孔子研究の方法論」において、考証的に過ぎ、第一編「第一篇 孔子之事蹟」に卓見がなく主観的考量が足りないと批判すること、資料が平板で資料批判が十分でないこと、時代背景との検討が欠けること、等であつて、厳しい批判をしているのではない。

もう一人、『孔子研究』に批判がある。山路愛山の『孔子論』<sup>32)</sup>である。この山路愛山『孔子論』と『孔子研究』については、内山俊彦氏、村山吉広氏、加賀栄治氏が論じているので<sup>33)</sup>、これらによって検討してみる。

『孔子論』の広告<sup>34)</sup>や「学会の劫運」<sup>35)</sup>で、山路愛山はあからさまに蟹江義丸の『孔子研究』への敵意を示しており、『孔子論』が『孔子研究』への批判であるのは明らかである。その最も批判しているのは材料論で、そこで山路愛山は『孔子研究』の史料批判が不十分であることを強く主張している。この孔子を研究する資料として、『論語』のみがやや信ずるにたり、『左伝』『中庸』『孟子』などが資料としては信用できないというのは、今でも通用する議論であり、山路愛山の批判が的を射ていたのは、諸氏の一致するところである。山下龍二が、「『孔子研究』の資料があればこそこの批判が可能であつた」と『孔子研究』を擁護するのも、山路愛山の批判を認めていればこそである<sup>36)</sup>。

山路愛山は蟹江義丸を、井上哲次郎を代表とする「所謂大学一派」として批判している。前稿で述べたように『孔子研究』がともすれば君臣道徳を強調する傾向があるのに対して、『孔子論』は君臣関係を契約と見るという、政治的な観点の違いが存在する。実際の山路愛山の『孔子研究』批判したのはこの点にあると思われる<sup>37)</sup>。このように、山路愛山の『孔子論』は『孔

29) 山下龍二 前掲 p.14

30) 丁酉倫理會編『丁酉倫理會倫理講演集』第33-34号、明治33年6-7月 大空社再版に収録

31) 前掲「漢學會の回顧」p.88

32) 山路愛山『孔子論』、民友社、明治38(1905)年2月28日『山路愛山集(二)』(『民友社思想文化叢書』第3巻 三一書房 1985年)所収

33) 内山俊彦「ある中国思想家－山路愛山について－」『中國の文化と社會』第9号 1961年  
村山吉広「山路愛山の『孔子論』」『漢文学研究』第10号 1962年  
加賀栄治「山路愛山の中国研究」『文教大学国文』第11号 1972年

34) 『独立評論』明治38年第2号(復刻版 みすず書房 1987-8年)

35) 『独立評論』明治39年第6号同前

36) 前掲「明治の孔子論」p.16

37) 前掲「梁啓超と日本の中国哲学研究」pp.184-185

子研究』を凌駕する部分も多かったのであるが、戦後内山俊彦、村山吉広らによって再評価されるまで中国学の専門家によって評価されることはなかった。逆に『孔子研究』は支持を受け続けたのである<sup>38)</sup>。

以上が、日本での『孔子研究』への反応であるが、決して大きな影響を与えたとは言えない。それに対して、中国での反響は顕著である。『孔子研究』は、中国において私が知るだけでも三回翻訳されている。1904年、1920年、1926年で、それぞれ王国維、梁啓超、錢穆と当時の中国を代表する古典学者が翻訳している。

最初が1904年に『教育世界』に掲載された「蟹江義丸著 孔子之學説」である<sup>39)</sup>。これは未署名ではあるがおそらく当時の主筆であった王国維によったものである<sup>40)</sup>。ただし、『孔子研究』全文訳ではなく「第二篇 孔子の學説」だけが翻訳されている。当時『教育世界』は桑木厳翼を始め多くの日本の哲学者の本・論文を翻訳しており、『孔子研究』もその一つなのである。従って第二篇の「孔子の學説」だけを訳したのも哲学に関する部分ということなのである。第一篇は前述の清代考証学の成果をとり入れた考証が主であって、考証学を身につけながらも哲学を志す王国維にとって重要なのは西洋哲学の概念で孔子の思想を分析した第二篇であったと推測できる<sup>41)</sup>。

次に1920年の梁啓超の『孔子』<sup>42)</sup>である。前稿で考察したように、梁啓超の『孔子』もかなりの部分が『孔子研究』の翻訳であると考えてよい<sup>43)</sup>。梁啓超が『孔子研究』刊行から10年以上たって『孔子』を発表したのは、前年の1919年に発表された胡適の『中国哲学史大綱』で画かれる孔子像に対抗したものである。胡適がデューイのプラグマティズムの方法論に基づいて孔子の分析をしたのに対抗するために、梁啓超は蟹江義丸の西洋哲学の知識とその分析が必要だったのである。

---

38) CiNii-books を検索してみると、『孔子研究』を所蔵しているのは初版が73館、改版が59館である。旧制高等学校、師範学校等戦前からの図書を引き継いでいる大学のほとんどに初版、改版とも所蔵されている、つまり戦前の中高等教育機関のほとんどに所蔵されていたことがわかる。また所蔵している大学では富山大学のように複数冊所蔵している大学もあることから、実際の所蔵数はもっと多い。

39) 「孔子之學説」『教育世界』82・83・86-89/161-165 1904:9・11・12/1907:11-1908:1 (『教育世界』(教育叢書第四集 1904年))

40) 楊冰「王国維の哲学思想の出発点「正名説」における桑木厳翼の『哲学概論』(1900)の影響 — 王国維の『哲学弁惑』(1903)を中心に —」『人文学論集』(大阪市立大学人文学会)第32集、2014年3月、pp.121-146によれば『孔子研究』も王国維の翻訳である。

41) この王国維の姿勢は、前述した貝塚茂樹が第一篇と付録の考証学的な部分のみを重視しているのと同様の対照的である。

42) 梁啓超『孔子』広智書局、1920年、『飲冰室專集』第三六冊(『飲冰室合集』北京・中華書局 1989年所収)

43) 前掲「梁啓超と日本の中国哲学研究」pp.181-184

最後が1925年の錢穆による『論語要略』である<sup>44)</sup>。1895年生まれと『孔子研究』出版時はまだ成人していなかった錢穆は、梁啓超の言葉によって日本に興味を持ち、1923年友人郭端秋が日本留学時に購入していた『孔子研究』を目にして惹かれたのである。

王国維、梁啓超、錢穆は、それぞれが独立して翻訳したものと思われるが、なぜ皆『孔子研究』を取り上げたのであろうか。それは『孔子研究』の特徴が、中国の伝統的学術の革新を志す学者達の興味を引くものがあつたからではないか。つまり蟹江義丸の『孔子研究』は、広範な資料をあたつてその成果を西洋哲学の用語で分析したものだったからである。つまり「近代」的なパラダイムで書かれた儒教論が必要だったからではあるまいか。

### 3. 京都大学に保存されている蟹江義丸氏遺稿及び書簡について

本稿でも使用した蟹江義丸氏の遺稿と書簡は現在京都大学付属図書館に所蔵されている。所蔵された経緯について、京都大学附属図書館報『静脩』に「蟹江博士の遺稿保存託さる」と題して「このほど、蟹江義丸氏の遺族から、博士の名著「孔子研究」の原稿をはじめ、幾多の論文原稿、校正刷り、論文の掲載された当時の雑誌、ノート、メモ等を、人文科学研究所島田助教授を通じて、本館に保存方が依頼された。」と記されている<sup>45)</sup>。著者は引き受けの窓口となった島田虔次名誉教授から引き受けの経緯について人文科学研究所梁啓超研究班で直接聞いたことがある<sup>46)</sup>。筆者は島田名誉教授の話を聞いてすぐ附属図書館に蟹江義丸氏の資料を探しに行ったところ、当時は一般書として書庫に保管されており、書庫内で数日かけて簡単なリストを完成した。蟹江義丸氏の遺稿と書簡はその後、遺稿・書簡の価値が認められ、現在は貴重書となっている。本稿を執筆するにあたって、書簡・遺稿を再び京都大学附属図書館で調査したので、そのリストを次に載せる。

#### 1. 蟹江義丸氏遺稿（一）（講義筆記ノート その他メモ） 京都大学附属図書館 1-40カ12

1-1 論理学 蟹江義丸 60ページ 日英独文

1-2 東洋倫理学史 第二稿 96ページ

---

44) 錢穆著『論語要略』商務印書館、1925年。1926年の再版の際には『論語要略、一名、孔子研究』と『孔子研究』の書名を入れている。

蘇凱達「錢穆と蟹江義丸 -- 近代日中思想史研究の一つの接点」、『千里山文学論集』、74  
2005年9月

45) 「蟹江博士の遺稿保存託さる」『静脩』第1巻4号、1965.3、P7

46) 「以前、医学部（？）の先生から、蟹江義丸の蔵書を寄贈したいという話があり喜んで受入を附属図書館に依頼した。明治の学者の蔵書と言うことで貴重な書籍を期待したのだが、案に相違して届いたのは段ボール数箱の抜刷・書簡で、蔵書はなく失望した。」とのことであったと記憶している。当時は詳細なメモはとっておらず、曖昧な記憶だけなのをお許し頂きたい。

- 1-3 倫理学 27ページ 日英
  - 1-4 無題メモ4種 Y.Kanie 署名 鉛筆書き
    - 1-4-1 無題1 Y.Kanie 署名 鉛筆書き 41ページ
    - 1-4-2 無題2 Y.Kanie 署名 鉛筆書き 9ページ
    - 1-4-3 無題3 Y.Kanie 署名 鉛筆書き 66ページ
    - 1-4-4 無題4 Y.Kanie 署名 鉛筆書き 8ページ
  - 1-5 支那哲学史資料 67
  - 1-6 孟子 22ページ
  - 1-7 書籍備考 2ページ
  - 1-8 書目備考 5ページ
  - 1-9 欧文メモ2種
    - 1-9-1 Auconaff mon-ler inusfijan Germmerihik Lmnekr 41ページ
    - 1-9-2 無題 (41ページ)
  - 1-10 十九世紀哲学年表 (50ページ)
  - 1-11 (無題) 5 Y.Kanie 署名 鉛筆書き 46ページ A6
  - 1-12 (無題) 6 鉛筆書き 46ページ B6
  - 1-13 支那語 鉛筆書き 20ページ
  - 1-14 儒教史稿 (表題縦書き, 中横書き) 1 16ページ
  - 1-15 儒教史稿 (表題縦書き, 中長辺横書き) 2 12ページ
  - 1-16 孔子論 第一稿 68ページ
  - 1-17 支那歴史 上古 24ページ
2. 蟹江義丸氏遺稿 (二) (講義ノート 語孟字義) 1-40カ12
- 2-1 『語孟字義』 (筆写) 51ページ 墨書 評点・返り点・朱点  
跋 右者伊藤仁斎先生之著作也 愚雖不学 有所見 親友玆借置今寫上者也 于日之嘉永元年冬三 蟹江克己 謹
  - 2-2 「哲学関係」
    - 2-2-1 実践哲学 (井上哲次郎実践哲学二)
    - 2-2-2 Utilitarianism by John Stuart Mill
    - 2-2-3 孔子及びソクラテス
    - 2-2-4 井上教授講演現象即實在論
    - 2-2-5 哲一〜四 ニ也耶, 喬答摩 陳即一方域
    - 2-2-6 古哲一〜十一 Metaphysics

- 2-2-7 現今之哲学 ab
- 2-2-8 西洋哲学史要 一
- 2-2-9 哲学史序論 古代哲学史 1, 2
- 2-2-10 文藝復興與時代, 近世哲学史 前期 1 ～ 3
- 2-2-11 近世哲学史 後期 一～十一
- 2-3 倫理学関係
  - 2-3-1 「獨逸文學小史」「法律大意」
  - 2-3-2 獨逸文學小史 蟹江生
- 2-4 独文史一 Perioden der dentrchen Literatur geschichte
- 2-5 岡村法学博士講述 法律大意 蟹江義丸筆記 (鉛筆書き)
- 2-6 「雑」
  - 2-6-1 伊洛三子信心録 保科正之
  - 2-6-2 Hertensterin : Die
- 2-7 「佛教学・儒教関係」
  - 2-7-1 支那教学史略抄録
  - 2-7-2 孔子一
  - 2-7-3 孔子二
  - 2-7-4 讀傳習録 蟹江義丸
  - 2-7-5 周末諸子学案
  - 2-7-6 支学一 周末諸子学案 (墨子等)
  - 2-7-7 支哲学2 専門の学派 (易等)
  - 2-7-8 漢学一 日本儒教学案
  - 2-7-9 (無題) 円覚関係
- 3. 蟹江義丸氏遺稿 (三) (覚書・抜き書き) 1-40 カ 12
  - 3-1 倫理学・儒学に関する論文 (草稿及び校正刷り)
  - 3-2 倫理学大系 (校正刷り)
  - 3-3 日本倫理彙編 (校正刷り)
  - 3-4 荀子の学を論ず 太陽第3巻8-10原稿
  - 3-5 倫理学講義 10・11
  - 3-6 最近哲学史
  - 3-7 曾子の学に就きて M34/9/26脱稿
  - 3-8 現在及び将来の理想 M35/4/26脱稿



- 3-9 荀子の学説の心理的基礎に就きて M36/6/27脱稿
- 3-10 夕桐阿波の鳴渡に就きて M36/8/2脱稿
- 3-11 徳川時代に於ける自由研究の精神
- 3-12 中世哲学史
- 3-13 実践理性批判 分析論 要領 哲学2年生
- 3-14 純粹理性批判 要領 (一) 哲学2年生
- 3-15 純粹理性批判 要領 (二) 哲学2年生
- 3-16 優波尼沙土の哲学思想 (不許掲載於雑誌)
- 3-17 故蟹江博士追悼会に於ける追懷談『丁酉倫理會倫理講演集』371

4. 蟹江義丸氏発表論文 (一) 1-40 カ 13

- 4-1 孔子研究 (稿本) 2冊
- 4-2 倫理叢話 (東京博報堂 富山房)
- 4-3 (論説) 墨子の学術 無盡燈第2巻第8-11号
- 4-4 韓圖の「超絶方法論」梗概 無盡燈第4巻第1-3号
- 4-5 ヘーゲル (ヘーゲルの哲学12号) 無盡燈 第5巻第10-12号
- 4-6 梵字及音譯羅馬字比較表 (印度哲学字彙附録)
- 4-7 哲学会会員名簿
- 4-8 道学先生とはなんぞや 丁酉倫理會倫理講演録 第11号 M/36/2/16
- 4-9 故会員黒田善三郎君肖像 (画のみ)
- 4-10 伊庭想太郎氏に対する道德的判断
- 4-11 自然律と人事律の関係 早稲田学報第35号
- 4-12 曾子の学につきて 哲学雑誌第16巻177号
- 4-13 孔子の所謂君子に就きて 東洋哲学第10篇1号
- 4-14 荀子の学説の心理的基礎 東洋哲学第10篇8号
- 4-15 藤村操の死について 新佛教第4巻第7号
- 4-16 夕桐阿波の鳴渡に就いて 兵庫県教育会報第167号
- 4-17 我等の希望 越中温和会雑誌第2号
- 4-18 哲学辞書総目録 第一
- 4-19 図書月報 第2巻第11号 東京書籍商組合
- 4-20 学士会月報 第198号 桑木巖翼「故文学博士蟹江義丸君小傳」 遺影

5. 蟹江義丸氏発表論文 (二) 1-40 カ 13

5-1 孔子の仁に就いて 富山県市立教育会第7号

5-2 徳の分類に就きて 教育学術界（東京同文館発行）第1巻第6号

5-3 理想の発展に就きて（未完） 教育学術界 第4巻第3号

5-4 学窓餘談 教育学術界第8巻第5

5-5 夏期講習会に就きて 教育実験界第12巻第6号

5-6 禮法に就きて 倫理界第2号

5-7（バウルゼン倫理学 共訳 博文館）

5-8（倫理学体系 共著）

5-9（日本倫理彙編 井上哲次郎と共著）

5-10（孔子研究 博士論文）

5-11 梅ヶ谷に與ふる書 太陽第9巻13号

5-12 第四部學術史 第三章哲学 太陽第6巻第8号 十三周年紀念号「十九世紀」

## 6. 蟹江義丸書簡 1-40 カ 14

	年	月日	差出住所	差出人	宛先	形式
1	1903	3月17日	安房郡北條町	蟹江義丸	蟹江操	封書
2	1900	8月19日	千葉県安房郡共條町	蟹江義丸	蟹江操	封書
3	1897	6月12日	金沢市小立野白山町	蟹江義丸	蟹江操	封書
4	1903	7月26日	福岡県福岡市伊崎裏	蟹江義丸	蟹江操	封書
5		7月16日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
6		23日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
7	1903	8月19日	福井県敦賀町	蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
8		6月22日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
9	1903	7月16日	播州明石	蟹江義丸	蟹江操	封筒のみ
10	1903	8月11日	三河国蒲郡町	蟹江義丸	蟹江操	封筒のみ
11		6月24日		蟹江義丸	蟹江操	封筒のみ
12		7月19日	岡山市小橋町	蟹江義丸	蟹江操	葉書
13	1899	7月24日	千葉県業條町	蟹江義丸	蟹江操	葉書
14	1903	7月18日	播州明石	蟹江義丸	蟹江操	葉書
15	1902	7月	国府津	蟹江義丸	蟹江操	葉書
16	1902	7月10日	相州国	蟹江義丸	蟹江操	葉書
17	1901	8月1日	山梨県南留邨下吉田	蟹江義丸	蟹江操	葉書
18	1901	8月21日	静岡縣費次元鈴川	蟹江義丸	蟹江操	葉書
19		4月9日		蟹江義丸	蟹江操	葉書
20		1月9日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
21		4月17日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
22		6月20日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し

蟹江義丸について

23		10月21日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
24		1月17日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
25		10月6日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
26		2月1日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
27		3月26日	安房郡北條町	蟹江義丸	蟹江操	葉書
28	1900	8月15日	千葉県安房郡	蟹江義丸	蟹江操	葉書
29		3月29日	安房郡北條町	蟹江義丸	蟹江操	葉書
30		7月19日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
31			安房郡北條町	蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
32				蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
33		8月16日		蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
34		7月30日	岡山市	蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
35		7月22日	福岡県福岡市伊崎裏	蟹江義丸	蟹江操	封筒無し
36	1898			蟹江義丸	山崎操	封筒無し
37	1900	8月12日	千葉県安房郡	蟹江義丸	蟹江操	葉書
38	1900	8月6日	千葉県安房郡	蟹江義丸	蟹江操	葉書
39	1900	7月26日	千葉県安房郡	蟹江義丸	蟹江操	葉書
40	1903	7月30日	福岡県福岡市伊崎裏	蟹江義丸	蟹江操	書留
41				姉崎正治	蟹江義丸	葉書
42				宇野哲人	蟹江義丸	葉書
43				姉崎正治	蟹江義丸	葉書
44				星野恒	蟹江義丸	葉書
45				元良勇次郎	蟹江義丸	葉書
46				堀謙徳	蟹江義丸	葉書
47				井上哲次郎	蟹江義丸	葉書
48				中島力造	蟹江義丸	葉書
49				星野恒	蟹江義丸	葉書
50				井上哲次郎	蟹江義丸	葉書
51				井上哲次郎	蟹江義丸	葉書
52	1902	6月29日		今俊一堅老生	蟹江義丸	葉書
53				姉崎正治	蟹江義丸	葉書
54				井上哲次郎	蟹江義丸	葉書
55				井上哲次郎	蟹江義丸	葉書
56				塚原政次	蟹江義丸	葉書
57				姉崎正治	蟹江義丸	葉書
58				宇野哲人	蟹江義丸	葉書
59				宇野哲人	蟹江義丸	葉書
60				宇野哲人	蟹江義丸	葉書
61					蟹江義丸	封筒のみ
62				吉田賢龍	蟹江義丸	封筒のみ
63				内山政如	蟹江義丸	手紙
64				大久保利武	蟹江義丸	手紙
65				栗木崇明, 栗木崇義	蟹江義丸	手紙

富山大学人文学部紀要

66	1899	9月26日		千葉県安房郡教育会	蟹江義丸	手紙
67	1904				蟹江義丸	手紙
68	1895	7月1日		Buchhandlung (W.Hertz)	蟹江義丸	手紙
69		1月1日		中村安常	蟹江義丸	手紙
70	1904	1月1日		八木三郎	蟹江義丸	手紙
71				太田秀	蟹江義丸	手紙
72				出莊	蟹江義丸	手紙
73				井上哲次郎	蟹江義丸	手紙
74		6月23日		建部遯吾	蟹江義丸	手紙
75				吉田賢龍	蟹江義丸	手紙
76				桑木巖翼	蟹江義丸	手紙
77				井上哲次郎	蟹江義丸	手紙
78				桑木巖翼	蟹江義丸	手紙
79	1904	1月10日		石川松涛	蟹江義丸	手紙
80				岸本能武太	蟹江義丸	手紙
81				中島力造	蟹江義丸	手紙
82		12月3日		蟹江常磐	蟹江義丸	手紙
83		4月18日			蟹江義丸	手紙
84		5月12日		深作安文	蟹江義丸	手紙
85				井上哲次郎	蟹江義丸	手紙
86				工藤文三郎	蟹江義丸	手紙
87	1899	8月28日		井上哲次郎	蟹江義丸	手紙
88				深作安文	蟹江義丸	手紙
89				井上哲次郎	蟹江義丸	手紙
90				矢津呂	蟹江義丸	手紙
91				深作安文・吉田静隆	蟹江義丸	手紙
92		1月6日		紀平正美	蟹江義丸	手紙
93				濱島栄治	蟹江義丸	手紙
94		7月1日		中島力造	蟹江義丸	手紙
95				中島力造	蟹江義丸	手紙
96				宇野哲人	蟹江義丸	手紙
97				深作安文	蟹江義丸	手紙
98				岡田正之	蟹江義丸	手紙
99				松本亦太郎	蟹江操	手紙
100					蟹江操	手紙
101				井上哲次郎	蟹江操	手紙
102				吉田賢龍	蟹江操	手紙
103					蟹江操	手紙
104	1900	6月4日		井上哲次郎	蟹江操	手紙
105		6月5日		宇野哲人	蟹江操	手紙
106				高島平三郎	蟹江操	手紙
107				諸橋徹次	蟹江操	手紙
108				桑木巖翼	蟹江操	手紙

蟹江義丸について

109					蟹江操	手紙
110				桑木巖翼	蟹江操	手紙
111	1911	8月18日		吉田賢龍	蟹江操	手紙
112	1904	5月18日		田崎捨吉	蟹江操	手紙
113	1933	6月20日		宇野哲人	蟹江操	手紙
114				井上哲次郎	蟹江操	手紙
115		5月2日		南日恒太郎	蟹江操	手紙
116	1908	12月21日		南日恒太郎	蟹江操	手紙
117				高島平三郎	蟹江操	手紙
118				吉田賢龍	蟹江操	手紙
119				岡田正之	蟹江操	手紙
120		4月11日			蟹江操	手紙
121				桑木巖翼	蟹江操	手紙
122				田部隆次	蟹江操	手紙
123		6月		桑木巖翼	蟹江操	手紙
124		6月		桑木巖翼	蟹江操	手紙
125				宇野哲人	蟹江操	手紙
126	1933	6月16日		姉崎正治	蟹江操	手紙
127		8月2日		井上哲次郎	蟹江操	手紙
128				桑木巖翼	蟹江操	手紙
129	1933	6月9日		建部遯吾	蟹江操	手紙
130		6月4日		塚原政次	蟹江操	手紙
131					蟹江操	手紙
132		6月5日		深作安文	蟹江操	手紙
133		6月1日		得能文	蟹江操	手紙
134	1932	1月1日		高島平三郎	蟹江操	手紙
135				友枝高彦		手紙
136				塚原政次・小西重安		手紙
137		7月28日		塚原政次		手紙
138				友枝高彦		手紙
139						手紙
140				深作安文		手紙
141				建部遯吾	蟹江義丸	手紙
142				深作安文	蟹江義丸	手紙
143				深作安文	蟹江義丸	手紙
144				Miss Shaw	蟹江義丸	封筒のみ
145		3月4日		友枝高彦		葉書
146		7月8日		井上哲次郎		手紙
147				塚原政次		手紙
148				桑木巖翼	蟹江操	手紙
149		2月20日			蟹江操	手紙
150				宇野哲人	蟹江操	手紙
151				宇野哲人	蟹江操	手紙

152			桑木巖翼	蟹江操	手紙
153				蟹江操	手紙
154			塚原政次	蟹江義丸	手紙
155			建部遯吾	蟹江義丸	手紙
156			建部遯吾	蟹江義丸	手紙
157				水登みす(子) 山崎操子様	手紙
158			塚原政次		
159			建部遯吾		
160			建部遯吾		
161					
162			桑木巖翼	蟹江操	
163			宇野哲人		
164			宇野哲人		
165		2月20日			
166			桑木巖翼		
167			塚原政次		
168		7月8日	井上哲次郎		
169			友枝高彦		
170			深作安文		
171			深作安文		
172			建部遯吾		
173			深作安文		
174			内田銀蔵		
175			友枝高彦		
176		7月28日	塚原政次		
177					
178			友枝高彦		

書簡については、筆者がくずし字に不慣れなため、解説できなかったものが多くあり、空欄が多くなったこと、ご寛恕願いたい。差し出し日は消印からも確認したのだが、なにぶん古い  
ため判読できないことが多かった。

この書簡について簡単に説明しておく。1～40はほとんどが明治32（1899）～36（1903）  
年の蟹江義丸が高等師範学校在職中に臨時教員検定委員となり各地方の講習を担当した時に妻  
操に宛てた手紙と思われる。蟹江義丸42-98は蟹江義丸宛の友人などからの手紙で、沼津での  
療養中のものも含む。99～178は蟹江歿後操夫人宛に出されたもので、昭和8（1933）年の追  
憶会の出席を含む。41以降の差出人は井上哲次郎16通、宇野哲人と桑木巖翼が12通、深作安  
文10通、塚原政次8通、建部遯吾と友枝高彦が6通、姉崎正治と吉田賢龍が5通、中島力造が  
4通なのが目立つ。これを見ると蟹江義丸の交遊関係がわかる。しかし南日恒太郎からの書簡  
で所収されているものは2通のみであるが、操夫人の回顧にあるように沼津療養中は東京の新

聞を送っていたとのことであるから、これは手紙そのものが別に保管されていたということであろう。つまり、この書簡集はこれで蟹江義丸の書簡すべてではない。

## 終わりに

蟹江義丸がどのような人物であったか多少なりともわかったであろうか。本稿は、蟹江義丸を知るためのひとつのきっかけとなれればと思ったもので、顕彰することを目指したものではない。知人の思い出などに記された興味深いエピソードなどもかなり省略している。また明治末という時代の中で、蟹江義丸が担った役割もあり、それに対してはいろいろな意見があらうことは間違いないであろう。本稿はこのような蟹江義丸の評価には敢えて踏み込まなかった。

また蟹江義丸遺稿・書簡については、一応のリストは作成したものの著者の力不足から、十分な整理ができなかった。今後に期することとしたい。

**【付記】** 本稿は学術研究費補助金による研究（基盤研究（C））「東アジア近代における思想的伝統の創造に関する研究」課題番号：17K02204）に関する研究成果の一部である。

本稿を作成するにあたっての資料調査において京都大学附属図書館の特殊資料担当の皆様にとにかくお世話になった、ここに感謝の意を表する。